2023（令和 5）年 6 月 28 日
「現代トルコ語の問い返し疑問文における接語mIの形態・統語的位置の問題」
発表者：吉村大樹（東京外国語大学AA研フェロー / 長崎大学非常勤講師）

トルコ語の動詞における形態素配列では、通常動詞語幹、時制／アスペクト接辞の後に接語 mI が後接し、そのさらに後に人称を表す付属語（接語代名詞）が後接するという順序が適格とされる。しかしいくつかの先行研究では人称を表す付属語が mI に先行しても文法的には適格と判断されることが指摘されている。本発表では、この現象に関連していわゆる話し言葉において短縮化された人称付属語に mI が後続する例がみられること、また問い返し疑問文のうち、とくに「諾否(yes-no)問い返し疑問文」においても人称語尾に mI が後続する現象があることを指摘した。この現象は、トルコ語において通常 1 語内の形態素配列は厳密に定められていることに対する反例となりうる。なぜなら、語境界を認定する際には母音調和効果が適用される範囲までが 1 語であるとすると、この 1 語内の形態素配列の順序が安定していない例となりうるからである。本発表では、音韻・形態論上は 1 語内部の要素として接語 mI, 人称付属語が構成要素となっている一方、統語論上は両接語がそれぞれ独立して別の語と統語関係を形成しているとする分析を提示し、上述のように mI と人称付属語の相対的な順序が安定していない理由は、この統語構造の違いによるものであるとする分析を提示した。